

本書は、子どもによる野宿者襲撃事件をきっかけに「ホームレス問題の授業」に取り組んできた二人の著者の講演録を収めたものである。巻末の野宿者襲撃・略年表に詳しいが、1983年から毎年、中・高生の子どもたち（一）に野宿者が殺され続けている。著者らは「障がい者」や「外国人」など、他どのような差別問題でもこのような状況はないと述べ、ホームレス問題を人権問題として取り上げてこなかった学校の責任を問う。

●危機的状況にある差別問題をどう教えるか

生田武志・北村年子著／ホームレス問題の授業づくり全国ネット編

子どもに「ホームレス」をどう伝えるか

——いじめ・襲撃をなくすために



A5判/216頁
 太郎次郎社エディタス
 本体1,200円+税

講演録は3部収録されている。ひとつ目は生田による高校生向けの講演、「貧困」と「野宿」の社会的背景」である。著者の生田は大学在学中から釜ヶ崎の日雇い労働者・野宿者支援活動にかかわっ

てきた。その自身体験も交えながら雇用・労働の問題がいかに野宿生活へとつながっていくのかが語られる。ホームレス問題は個人の責任としてとらえられがちであるが、この問題がいかに自分たちの社会の仕組みのなから生み出されてくるのか、「いす取りゲーム」や「カフカの階段」など、平易なたとえ話でわかりやすく説明がなされる。

もうひとりの著者、北村は子どもに、それと関連づけて子どももの野宿者襲撃事件などの取材を続けて

きたジャーナリストである。教職員向けの講演「ホームレス」襲撃は、路上の「いじめ」と、中学生向けの講演「生き

ててくれてありがとう——襲撃・いじめをなくすために」の二本が収録されている。北村は、ホームレスにある人々に注がれる「努力してがんばらなかつたから」という「ガンバリズム」と「自己責任」の眼差しは、一方で、子どもたちを苦しめているそれと同じであると指摘する。また、「ホームレス襲撃」にかかわる子どもと、いじめの加害者となる子どもは、自己を肯定できない苛立ちが他者への攻撃性に転換していくという点で共通しているという。

講演のなかでは教材DVD「ホームレス」と出会う子どもたち」の上映も行っている。実際には本書を読んでもらいたいが、このDVDを見た子どもたちの反応のなかに、あらためて教育の可能性もまた見出せるだろう。ぜひとも各学校で「ホームレス問題の授業」に取り組んでほしいと思う。

とはいえ、人権理解の基本となる同じ苦しみや悲しみを感じる「ひとりの人間」としての共感を持たせることに主眼を置くのか、あるいは、生まれ育ちの不平等を背景としてホームレス状態に人が置かれていることが社会による人権侵害なのだというところに焦点を当てるのか、ねらいをはっきりさせないとぼやけた展開になりかねない。タイトルの「子どもに「ホームレス」をどう伝えるか」はそれ自体、深い問いである。

なお、本書では講演録のほか、実際に各地で「ホームレス問題の授業」に取り組んだ教師の実践紹介や、授業を受けた子どもたちの感想文、「授業で使える資料集」なども収録されており、広く学校教育現場での人権学習の展開を考える大きなヒントが得られるだろう。